石門

心學道の話 初篇 上

ロ 9
3895
1

門 ロ 9
號 3895.
巻 1

廣嶋 奥田頼杖翁講話
江戸 平野橘翁先聞書

石門

心学道の話

しんがくみちのはなし

書舗 玉章堂

早稲田大學圖書館
昭27.6.16
藏書

心学道乃譚序

頼杖先生名在中氏ハ奥田。俗称ハ壽太藝陽の人なり。湛水先生小親炙して石門の蘊奥を究め四方に遊で道の説を数歳。天保己亥乃し東都にまて講を参前舎小開く予共ニ聞ことをと得せり。朝夕傍小在て。

其人を導くを視るに能機に従て應すること縦横自在なり譬ば鳥の空を飛が如く月の水にうつるが如く開合浅深超然として其跡の尋ぬべきなく聴者をしてよく言に因て以て言を忘れ迹に滞らずして其指歸を得せしむ實に海内の一人也といふべし予道話を聞に隨て筆記するもの年歳にして積で五十巻に及べり仍て

私に其書を選て如是我聞といひ人に授て教導を弘るの助とし須日京師の社中これを見て以て竊に刊行んと謀り剞劂既に成るに及で先生に告く先生笑て曰余の如きは一時投機の説法何ぞこれを不朽に傳ふるに足んや然といへども事既に成ての後に予に告く今にして止むも亦不由なし然ども如是我聞の名大にそのかなふ却て宜く心學道の

諸なとゞ題して可ならんとて許されざれバ。嗟嘆て予固より鈍筆短才先生の才辯は禪論に於ては。これと說きたまひし。遺漏なきを記しあまねく。諸路の顛倒もまた多かるべし。世の此編を讀もの。宜くこれを以て。先生を咎むることなかるべし。予今茲偶京師に客たり同社の人乎が一言を徵して。筆記の證と為さんことを頻りに乞ふて止ず。因て辭する事あたはずして。其由を巻端に述ること爾。

天保壬寅年冬於洛東觀行舍之旅寓 平野橘翁重猷謹識

子曰性相近也習相遠也とは夫人性氣
質美悪同しくのうに生れてより孩提
の時より父母と暮し長するに随ふて
又と教ふ心の如き初より相遠ふらに
然るに善を習ふ者は成長するとも至
悪を習ふては生長するもなほ其悪なるを
變化して善に移すに教あり茲に
藝陽奥田翁性善より篤く聖学に志し

梅岩先生の遺教を奉し遂に其蘊奥を極め道を諸郷に唱ふ事多年あるひは卑近の俚言を借りて孝弟の深意をさとし古今の事實を述て忠信乃大義をあらはせり故に群集する者皆感發興起して悪習を變化して善にうつるもの亦少からすされは彼の性およそ也といへる捨言をあつて於て益明かなるもの我石門に功ある事あけていふへけんや翁一とせ東武遊説のとき平野某側にありてそのまゝ説話を筆録し須日梓に彫て世に公にせんことを謀り序をこへり求む余後生不学也然れともこの書のなるを悦び需に應しつゝ筆をとりて其大要を剰

天保癸卯之春

上河明識

心學道之話初篇

藝陽 奥田壽太講話

東武 平野橘翁聞書

前席

子曰學而時習之不亦説乎有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不慍不亦君子乎

これハ皆さま御存知の論語巻の一の首に出て御座ります大聖孔夫子の御詞。さてわたくしハ文盲者で論語の書物を講釈いたすなどゝ申事ハ中々出来ませねどされど此御詞を題として書物を讀ぬ女中方や子供衆のために道の御話といたしますれバ先此子曰とハ孔子の

仰られたりける。学ぶるとハ何を学ぶれバ人に生れまして
人じゃによつて人の道を学ぶので御座りまする。其人の
道とハ何ぞ。恐ながら上ハ
天子将軍様から下ハ賤しい銘々どもまでも父様母様も含
ても人の形に生れて居る者ハみな五常といふて仁義礼
智信此五ッの道理を生れて居る也。身に行ふ所でハ
五倫といふて先親へハ孝行主人へハ忠義夫婦ハ和合
兄弟ハ睦じく他人の交ハおもに信実をもつて交る。
これが誠の人の道と申すものじゃ。その道を学ぶと申すで
御座りまする。此世界の一切万物何が一ッも道を

守らぬものハないもの。皆おのおのが道をたゞ一編に勤めて
居りまする。先鶏ハ毎朝七ツ起して子丑寅卯の時をつげ
犬ハ門をまもり猫ハ鼠をとり牛馬ハ重荷を負て人の
力をたすけ須臾も怠るといふ事ハ御座りませぬ。さるに
よつて終に牛馬が牛馬仲間の離出しがあるといふても
逆隠も来ませぬ。犬や猫が獣物仲間のえんせしに
首くゝられるも無い。折ハみどり花ハくれなゐ松乃
木のゆがむも杭此木乃すぐなるも大根乃太いも茎の
短いも。どれも昔から不易仕組ちつとも違ハござりま
せぬが、只く毒るものハ人じゃ。万物の霊と生まれながら。

その霊たる事をしらねばこそ人にあらざる人が多い
道理識人乃狂弁に
中くらゐ畜生なれバ万物の霊乃仲間へ面ハよごさじ
あんまり自由自在乃勝手なる結構な智恵を生れつきて
居る多く人だからハ教に由ねとつい擅なくまよひこむ大なる
ものじや。さるによつて各々に精出して人の道を学ぶ
稀べなされるで御座り升れ左右よ
人多き人の中でも人ぞろひ人といはれ人となる世人
扨此人は又常又倫の道を生れつきてあるハ丁度此手又右
乃指れつゞつてゐるやうなものじや。子供衆や女中方ハ

毎々の指に一合てばらばらしゐると続きがりまれた是此合
指が仁で親に孝行にかゝる拇指無名指が義で主人に忠
義で有る指将指が礼で夫婦の和に、指が智で兄弟乃序
巨指が信で朋友に信とふ世がなりので。ゆびもこう
又本指であると何でも統まても揃れりして自由自在が
お来まし。なんと結構なものじや。此なりませぬか
世の中に花も紅葉も金銀も自くてならぞ精出してとれ
此精出してと云ふがかんじんの事じや孟子も万物
皆我に備る身に反して誠なれバ楽是より大なるハ
なしと申されまして世界皆ことが物ありまへんのじや

けれど。そこへおしでも身勝手贔屓する根性が出かけると中指を一本づゝ折て仕廻するものじや先親に不孝して人差指をおり主人に不忠しては名無指をおり夫婦喧嘩しては親指をおり兄弟確執にそうおうては小指をおり一家親類朋友は嘘の附合して巨指をおると基の生れ付ハ又なお勘当附ておりても幸折て居るべ。ちやうど擂子木ところじやうふものになつて何もこれも掴しもせぬ。不自由なるものじや若い方は此指を一本づゝ折ては居ねならし此悪く五の指合せの清き出世とおりくさへてゆらり

じやによつて神仏を拝むにても両手の指を合すじやろハ左ハ陽右ハ陰陰陽合体して是を神道では混沌未分の姿をもつて天地一体自他和合の姿じや手を合り
じやなんぞへ心持も身の行も格別のとほりなつてじや。それでこそ神も仏も御感応はあるまいそれと手拝
和合の姿しても心持や身の行は擂子木のやうなる握り拳にあつてそれを神仏のまへでつきおし家内安全息災延命家運長久諸願成就と厄払などのひ並べても神や仏はいちらう向ふて御座る
祈てもあまりかたらこそ能事いのるんじや徹なければ

それにつきて爰におかしい咄がござります。ある田舎の
百姓の内に後生願ひの婆さまがあつて毎朝如来様へ
そなへる御飯は、お鉢をもつて別に焚て具へられ。
そのまた焚釜も杓子も桶も布巾も皆如来様用と
いふて別にして置く。扨その釜や杓子は御釜じやの御杓
子じやの。いや御桶じやの御布巾じやのといふてゆく
家内中が如来様の事とさへいへば。いつまでも様は不
にする様の御勝手様の。いや御香爐様の御佛壇様
のと雑巾までに様と御の字を付ていはるゝが夫も
畢竟ハ信心ぶかさも極楽へ生れたいとおもふて百味飲食の

御馳走を背おわずに喰して置かふといふ根ハ欲心から出る
のじやけれど夫もまあ悪い事でハあるまい。夫と云ふに
此世を正直にさへせらるれバ祖師や仏の御心にも叶ふと
いふものじやけれど爰の内乃ハその事が御坊様も理屈も
わるい只今生の世ハどうぞ後世やといふて子を我儘に
稼ぎに今生でハ不孝も無理も我儘もかつて
自身ハまる様じや何と続かねるのじやあるまいか
後乃世をかり此世じやとて何ぶ不するな後の世ばかり己が世なるまいバ
未来永々の極楽乃種ともなるものも未来永々の地獄ハ
種ともなるのも皆此後乃世から仕込む事只此かりの世

こそ大事の世じやといふ事を是と承知て得手て居る
りのみへ。どふしてもといふ事とおもふて居る。そこで
お後筭用も合ねる事が幾等もある。先毎年御上へ納る
御年貢ハ下の役人から五度も七度も催促うけ不済
又当つの孫ハざさね癖は寺の冥加や寄進にまで潤を
流し身の皮をいでもよる事じや。その上親や支乃
命日にハ自力にうると申さいで精進もせねが祖師の
命日ハ八日廿四日何日擬乃廿何日擬のといふて精進
する事さへ済して擬乃まゝ透さ内也へ嫁も息子も我侭
事まして何ぞ一ツ二ツ宛気にいらぬ事があると。

親までも夫でも大きなとゞり声して物をいふが其
癖如来様へ向くと急にやさしい作り声で南無阿弥陀仏々々
かはる浅ましきいつはりのものを此身経には以恥けよふ。何
あるがやかましいはなやしよお構て乃き人手かんで
如来様と載き物にさへ是等が心の操み木実にと
りの由へ佛も祖師も嘸御かげさるゝ。まで何うれハ
まあくつの事に極楽をあてにして悪い事せまの
如来の御恩を親にも不孝をせまのし。すうやハ
せねば。なさけるたい事仕て是ると実に血の涙こぼして
御座る。なんとよふ生かさりのしやるいゝら抜その内れ

婆さまが。かの御鉢に糞茶を洗ふまいぞとまで洗ふてしまふ
るゝ八分へ。擂鉢へ茶を入て擂子木持て洗ふてまはる處へ或人が
夫を見て何事ぞ其中なる不自由な事ぞとさらし申さるゝ
問へバ婆さまのいはるゝにハ如来様へ奥る御鉢じやものを手
でハ洗はれぬ。けがれといへバ手ハ不浄なりので。どの様によく
洗ふても我の身は垢が溜て何事へ不浄な御座る夫で此
様に擂子木で洗ひまはるといはるゝ。ゆへそんなら如来様拝む
にハどうして拝まうしやるぞと問バ夫ハ勿手を合して拝む
まはるといはれる。そこで彼人が。それハ又不浄なものじや
拝むにもやつぱり擂子木を二本合して拝まれよ

いはれたれバ婆さまがたいそう腹を立てゝそしらるゝといふ
人じや其様な事して八寸一尺昔しからも如来様へ
大きな御無礼。お仲ない事じやといはれしぶらるゝさま
何でも神仏へ向くバ両手を合して。又中の指を拝る
其が和して居るが。よく身で遠かくつてみると仏様や
祖師方ハ擂子木合して居るでハないかんといふ昔しい
神仏ならしやうかいふ夫とて昔の仏や祖師方が
不便に思しめして。どのやうだまして引下すうして
ありと人に人の道を行しておやり。さらし種々の言
便を御立なされしもの。じや。てうど鏡うけの元の

なれバ笛吹けり歌舞して甚麼変がちみだれ変ふい
だつけりに。ご主も出て来るのじや
方便を一つ云ふ室也、人の調子にのりておどり念佛
是じやによつて稱名の後ハよく清めすくで申より作礼と
そうしてくるのじや。さるハ此方ハ私仏人数多様より乃
ひと様ふのじや。南無阿弥陀仏。南無妙法蓮華経も
わからの世話やくのじやから、向ふハ清浄無垢の仏様じや
かつまり世話やくより乃者ども、此方と南無阿弥陀
佛。南無妙法蓮華経の辞とせるのじや
南無阿弥陀の名をも思ひしに縁なる我が随妄之けり

そこで念佛宗でハ利剣即是弥陀号じやの一称弥
陀仏名識無量罪のといふてある。又日蓮宗でハ頑凡の無
明を切る大利剣。生死の長夜を照す大燈明。本門
寿量の南無妙法蓮華経といふでハないか。夫を手に入と向ふの
世話やくも身の招よ思ふて身に立かへるといふがるやと。
摺子木よ本よるて法話。大事な教へと教へちやふ
まるのじや。是じやによつて人ハ、たゞ聖人中庸の教
へによつて人の道を学ねバならぬ事で御座りまする。
是ゆへ孔子が先づに学ると伝へられましたぞ。その文
学ぶといへどもをろそかするときバ学ぶとハいへず。学ぶとも

ことでなく乃聖賢の御手本や御行状見ならふことハなかなかして。それとても手本に及ばずながら精出して真似するのじゃ。夫を学ぶといふのじゃ。さきまで文殊ごとおの文盲なものハ聖人がどのやうなものやら賢人とハどふした人中へ出て無調法しうろたへるのが出来るといふものて。わちらも手本とおうして今日学問にある孝行なる人や忠義なる人や正直なる行のよい人を見て夫を手本にして真似をするハ孔子様も賢とみてハ斉からんことを思ひ不賢を見てハ内に自ら省るとも仰られ又三人行くハ必我師ありて其善なる

者を択んでこれに従ひ其不善なる者ハ而もこれを改むとも仰せられし人の風俗につき我風俗を改むるにそのてく。じや然し又今時乃者ハ男や女中など人によつて人の真似をせよといふて息子が遊び郎乃真似するより女房や娘が遊女芸子の手本を真似るより手代小者までが歌舞妓役者の髪形は真似して肉まつハ悪い真似仕居る。そふやよい物は手本が無いか外のはうしじや。さるものにようて心学と申す物の中ますれ。どふぞ此志を此方へ直されて此悪行をなさまくて此ぬらうしませんは道に取り結構な此師道様の方の狂言し余所を外れぞ学問の気色

るし其放心を収るのじゃと御註にお書付のなされし
めでたい御師匠様。此御師匠様ハ目もなく耳もなく鼻も
なく口もなけれど万事にかも滞る事ハないさくる
御名也。昔から唐でも天竺でも御名ハ色〻ハ御師匠
様じゃ。先我朝でハ神明じゃの五臓乃神君じゃ
のといひ儒道でハ性じゃの中じゃの誠じゃの明徳
じゃの至善じゃの。仏法でハ仏心じゃの仏性じゃの
本来乃面目じゃの主人公じゃの。又老子でハ谷神
じゃの玄じゃの玄又玄じゃのといふ其御師匠様へ
まあ一寸御近付になられぬるがじゃ此石門へ

御入なされませ。此方が御手引をいたしませう。是ハ人乃浮世や
結ハ苦さぞろりでハ分らぬ身中の塩味乃御しらしといふて
我とよが味で知るのじゃ。それを知ると正直の人此乃道が
知れる道とハ何ぞ。雀ハちう〳〵烏ハかあ〳〵柳ハみどり
花ハ紅人ハ孝悌忠信と乃造作の口癖小言もよくいふてと
じゃが丈もそまと耳に馴るぞろりで道ハ其手を振な
りのとぞろり心得て孫ハして置と太き乃道となるそで
じゃ孝悌忠信仁義礼智明徳至善誠意正心と名目
ぞろり我古乃道座候どもなく云ても此御師匠様を知
孫ハやつぞろり揚子本仲間じゃまで老子ハ大乃すたれて

仁義おこゝろしかとしやまして正真そのくだちうしくハすめ
かあくハ烏みどりハ柳紅ハ花。孝弟忠信ハ人じやといふが
よいでまを望ていふによるうる文ハ江戸の神田乃相生
丁ハ参お会じや。そこを参お会のお生丁乃神田ハ
江戸じやといふものゝ京乃三条大橋からいへバ大
橋ハ三条乃京じやといつて大きなる遠ふなれバじや
そこで孟子も舜ハ庶物に明らかにして人倫を察しなさる仁
義ニ由て行ふ仁義を行ふにあらずと仰られた
天地のひらけぬ先ニもあつたん卵乃中ハ静まらぬ
生まれぬ時なるを名付るやうな文字とするのじや

是心自太古何ぞ必しも唐虞に生ぜんといつて天地乃
開けぬ先から治まりの御師匠様があつて二六時中に身に
附添てござらせらるゝ丈で有るに。そふするのじやものを
教へて下さるから夫を手本に精出して学でさへゆかねバ
ならぬじや是程添ふ学問といひますれバどふぞ読度も度に
御志をお立なされませ扨又何を学ぶまでも手本に
寄りを其一遍か二遍其似しただけでつぎふてゆ
申しま其の手本の通りにいたされる。なるほどと仰られ
るといふるじや子供が手習をするまでも手本乃
通りを毎日毎晩幾遍もくりかへさるゝと後にハ

手本の通りが見事に書けるやうに手をならはさる。それで手習といふ人の心もその通りで親に孝行主人に忠義、夫婦兄弟朋友の交りや家業の勤や万事の御手本をとつて身に省て時々刻々に本心の御師匠様是御聖賢の通り弟子に真似び行ひ馴るるのじや。是を学んで時に習レ之と仰られたさ

真似をせぬ主人に忠義親に孝ひとのすれば本真でなる此ひとのといふが習ふ事じや。よづつ琴三味線の稽古でも初の我が思ふやうには弾かれぬ。ちんつんてんが。ちんくてんと成らぬ。どうしてもつんちんに成らする。

そこでぴつたりと弾て手があがるまで来るとちんつんてんも。どうしてつんも我思ふままに弾かれる事になる。そこに成るとどうも言はれぬ嬉しう成て来て後には飯喰ふ事も忘れて弾きたがる。よづつの技芸でさへその通りじやものまして人として人の道を行ふ事が。かわりますによく出来ると是が嬉しい。ここちよい事はあるまいかいなじやによつて不二亦説一乎と仰られたことじや。まつし是は聖人の御辞で申し我々の如きの及ぶ場所ではない御座りませぬが。恐れながらも御経中の悟り此門人にて一度なりが本心の端を知ては今までの余所の

ことの中には思ふて居る神道も儒道も佛道も皆教る事
じやといふ事が合点が出来ぬ神も佛も聖人もやんさう
別段申でふるといふ事が知まる故へ万事ふれバ合点のゆ
かぬ事が。よく決定が出来ません。そふすると今まで思ふさ
事ぬけてゐる事が。そろ〳〵うそ恥かしう成つて来る故へ
たつた此間まで。おれハかしこいおれハ利口なと思ふて
居た我慢の鬼めも。そろ〳〵角を引込め欲の皮の
千枚張が一枚でもはげるにつけて次第〳〵に安楽の境
界に赴く。その嬉しさハいかゞさ。どふもつくさまさ
ものじやがいかなりませね実に手の舞足乃踏事を志れ

じや最前の譬に
何程でも智恵学でもいかゞじや此儒佛乃あしらいにかゝつてハ
たつた一つおまへがたの張臂もやめにして御免となさ
まのぞりくるし足比丘尼もその外からしさ乃天竺國乃奈落
でも。ふまぬ気をつけて肝心の事を見せじやうふ
不思議なものじや。そこで智恵物も見えれぬハかうみて
よりのと生じ。ちらりと物が落ちてもめつたに底乃
付ねやうに頭巾がかぶせてある又目ハ一身の眼で
大切な所へおし内へ引込て振り廻り眼とらゐなりのを
抜へ開て閉も目内ゟする中ゝな任せにしてよく葉の

まいらねならん睫といふ埃拂までつゐてある又その上乃
方へハ天窓の庇とみるやうに眉といふ廂をこしらへて
上から流るゝ汗乃を縁へそらすやうな仕掛まで開
閉するしね鼻の穴へハ風乃吹込ぬやうに上からぴたんし
屋根が葺てあるゆへどんな小嵐に向て往ても内へ面
風乃吹込ていふ事がない。さて上屋根がおしひらく
きうくつじやひよつと此屋根が一ツでもなくてハごらう
じませ夫ハ難儀なものじや冬むきさ風の吹しの時
か、後向き行きおぶりして歩行ずやなるまいぞふすると
泥濘溝へ踏込ずもう石や車へ突当つて大怪我せうや

なるまいね。それと其搖なところで頭ハもたし自由自在
外受挑ならもやつぱり此屋根の葺そのある應あり
がへるすじや。そして此屋根ハ一生葺替る乃世話も
のいらぬ。さうし善ハ気ハかつこれ程揃つて悪い所へ
行と命より先く此屋根とやぶつて仕舞ぞ大うすな
るとじや又口ハ一身を持ふ食物のへにもへ是又大切の
場所じやよつて搗利息のさし受けが仕てある先
唇の伸縮ミせる工合から向よりのあるへ大小に
よつて夫相應小四門乃開閉内にハ其をいふ役人と
附て置て於菊でも牛蒡でも芋でも大指でも何でも

事で。ゆるごなしにおそろしき役人が甚い辛い吟
味して後の中へ通り込まぬやう自身御関所あり給
りの悪いもの八毛すぢ飯乃中に小さい石が交つて在
ても。ムヽメヘと無理に推込にふしぎのものじや。またあ
るて異の障るハ。てうど夫だけ脾胃が弱つたのじやゆへ
我慢してかつさまかふいりの喰るとの夫乃化つまし。わ
じや又耳ハ人声の気遣西々へ去関捕も大きふに左右へ
張出して。てうど酒やの亭戸るやうな事が抜つて
ゆる夫らし又手足や指のぷしぐの伸屈まる。そろう
きのある所へハ。てうど夫だけ筋でも皮でもつれるぐ

おしづつのゆるみもつけなゆか又指ハ又体乃端小口で
抛ふ障るところゆへ。かつさま捩ド乃未ぬ指に痛とのふ
今更中までが打てある夫らし肉の時什細工。筋骨ハ結絶
かして五臓六腑乃結を工合。此学者揺ハ当て作らうド
きつかふものじやぞへ皆木火土金水の寄せ細工。
出来合ハ抛るきど天道様の御細工ハ活として御備さ
りのじや。それがその人目耳万乃皮形とまん。耳ハ
万わ音声と聞鼻ハ嗅。口ハ味ひ手ハとり足に
行毎に隣より眼が居り口で見る皆。なれ
より自由自在を働くハ。どかしき奇妙な仕うけである

ちつともお不審がつてはゆかしませぬ實に道理じやも
真黒な理屈や算用も。そつきてのものじやぞよ。
それにまたおいらが気ずいきまゝにひるぐ。おれがからだは
我が物で。おれが自由とおもふがさわしんばし思ひを
まじや。そのまゝひの思惑が。われは分つしきおれは利口
なといふものが出て。どふ参るがらふ参るふ参れべどふ
参るとも秋がらの晩までも碁の待手と考へるかうれ手と
縁がらの親とおもはのより胸の中の一人角力どふ参られと
悩と原因果なるじやの情あつるじやのと天と恨み
人地獄め。いふに天道様がけさる志やきぬとて。ゆんまり

我儘といふものじやあるいは。ぐずくとして不業者な人のかし
家く家賃いつもすれ延てもらひ余り結構すぎるゆく
いつのまにか中とへいふぶりのくし思ひ付後まへ返つて
母屋へ家賃の催促に往きうなるのじやあしいづき
仕合のよいところへさへづくはいふまいせね

中の巻へつゞく